

人生説 : 雑録

著者	銀城處士
雑誌名	龍南會雜誌
巻	2 5
ページ	3 7 - 4 0
発行年	1894-03-31
その他の言語のタイトル	人生説 : 雑録
URL	http://hdl.handle.net/2298/4372

きあり。

結 論

吾人の言にして果てて錯誤ならんか、以てユーゴーの眞意知るべきあり。彼はフハンチンを以て母親の Model とせしあり、母親圓滿の情は蓋しフハンチンの如きを云ふべきあり。其悲、其哀、残は即ち残されど抑も之れ枝葉のみ。ユーゴーの眞實寫さんと勉めたるは實に悲哀の結果、果して如何にあらんのみ。

「親情」とは何ぞや諸君若し知るべくんば乞ふ行きてフハンチンある Model を精察し見よ。其中に「不斷」の鎖あり、ユーゴーは敏腕一舉以て諸君に揭示すべきあり、其處に忍耐の奇魚あり。ユーゴーは饒々喃喃耳痛くも教示すべきなり。茲に希望の光線あり。ユーゴーの大鏡面は陽光一射直に一卷の蒼空に Mirage を顯出すべきあり。仰で前面を見よ、精巧の彫像彼處にあり、之れユーゴーの彫刻せる者あり、人はいざ知らず、吾人は之を指えて親情の Model を顯せるフハンチンの像ありと云はん。

(ねとり)

(自註)此篇冒頭に「彼は嫁儼として云々」以下の黄金と眞珠と云ふは、前者はフハンチンの頭髮を指す、後者はその皓齒を指す、由來する所はユーゴーの言葉あり。

人 生 説

銀 城 處 士

生の因て來る所死の因て來る所を究むるは釋氏以上の明を要す我學古今に通ずる能はず才能中人に及ばず奈何ぞ生死の理を言はんや

渾沌たる一氣分れて天地となり日月とある天地日月たるべきの理之をして然らしむるのミ豈に始よりして天地日月とあるが爲に渾沌たる一氣あらんや夫れ兩間に位するもの森羅萬象何ぞ限らん上に日月あり清光長へに六合に照徹す下に河海丘山あり魚鼈禽獸游躍飛翔す河海は魚鼈の棲む處而て地は河海を湛ゆ然らば則ち魚鼈の故を以て河海あるか河海の故を以て大塊あるか地あるの時未だ河海あるず魚鼈あるの時既に河海あり之に由て是を觀れば河海丘山豈に魚鼈禽獸の故を以て存するものあらんや河海丘山の要する所なくして生せんや知るべきのミ

而して人亦生を此間に享く奈何を獨り要する所あるが故に生ずるものあらんや是を以て人生れて天に負ふ所なく父身に負ふ所なし何すむぞ生に對する務なるものあらんや茫々上下幾千載而して死に求むる所ありて死せしもの蓋し幾人ある人間萬事死に至て休す死して後復何をか求めん人情死を忌み已むことを得ずして然る後に死する豈に偶然あらんや幽より明に來り明より幽に之く態を變ずるに於て何ぞ擇ばん既に死に目的なくば生のみ豈に目的あらんや只人間たるべきの理氣熟するが故に漫然として生れ出でたるのみ人生何ぞ必然の務なるものあらんや衣食起居進退勤怠只意の欲する所のみ何者か能く之に干與することを得ん之を譬へば人あり事なくして漫然家を出づることあらば其の東すると西すると遠く之くと近く避ぶと利害に於て何の關する所なきが如きなり然れども此の如きは之れ動物學上有脊動物たる人類と云ふに於て損益あるのミ豈にこれを以て萬物の靈長と謂ふとを得んや

夫れ人と禽獸と皆家あり人と禽獸と皆情あり父母兄弟妻子朋友は禽獸も亦之あり二足にして立て行き語るに言辭あり食は火食にして着るに衣ありと雖も何ぞ萬物の靈と謂はんや物各長短あり人智を

以てするときは鳥は飛翔を以てし魚は游泳を以てし獸は力と驅走を以てすべし長短を較して靈長を謂ふが如きは得べからず人の万物の靈と稱する所以は只五倫五常なる乎哉然り而して曾て天に負はず又身に負ふ所なくして生れ敢て他の干與を容るゝを要せざるものにして尙倫常の道に従はざるべからざる所以のものは生をて君臣父子夫婦兄弟朋友あればあり之を僻へば始め日月あるの時未だ日月の要なく人物禽獸草木の類ありて始めて照すの要生するが如きあり而て照すの要あると要あらざるとは日月たるに於て何の利害なしと雖も人物禽獸草木に就て之を言へば日月照さざれば衆星と擇ぶふきなり之に由て之を言へば日月は照すが故に衆星の上に位し人は倫常によりて萬物の靈たり水の川たるが爲には必ず流るゝを要すると其義一のみ

果して然らば人は倫常備り具して人生の能事了るが何ぞ夫れ然らん人生して世道人心に益なく之あるも世に利なく之あきも世に害あきが如くんば生は是を徒に蛇足あるのみ生をして蛇足たらしむるは自ら生を亡すもの始より生れざるものと何の差かある斯の如くにして得々として萬物の靈と誇るも獨り禽獸草木に耻ぢざらんや禽獸草木は各其要あるあり水あり滔々として流れ浩蕩として大江の如きも灌漑に利なく運輸に要なく又魚鼈蘚苔の産あくんば川は即ち川ありと雖も川あきと等しきが如きあり而して世道人心を益するの大小優劣は一に其人の智愚賢不肖によりて分るゝものなるが故に大小優劣は強て問ふ所にあらず只常に心を是に存すべしと云ふのみ常に心を是に留めて其最良を行はゞ其績の如何は何ぞ介意するを要せん然れども之をあすに於て措置其宜に適せざるが故に敗るゝものあるに至ては又言あき能はざるあり

夫れ伸者時に屈し進者時に退く天下何者る能く終始一貫伸び且進むものあらんや道に興廢あり世に

治亂あり一盛一衰の已む能はざる夫れ此の如し之を惡む之を避けんとするも竟に何の功あらんや地の左旋を惡み晝夜の更代を慣るの類至愚と謂ふべきあり夫れ進むは快事なり人の多く欲する所以あり然れども徒に進むの快に耽て緩急利害を測らざるものは所謂猪突のみ戒むべきあり然れども難に遇へば逡巡えて進むこと能はざるが如きは之れ懦夫にして論するに足らず共に事の中を失するものゝして眞に道に志すものゝ爲さるる所なり然りと雖も進むありて退くを知らず難を見ては好で之に就き易に遇は殊に之を去る俗謬り稱して勇とあすと久し勇名は人の欲する所血氣多く之に誤られ其猪突に陷ることを悟らず慎むべきなり夫れ能く進むを以て勇とせば豈に能く退くを勇とあさるるの理あらんや設令能く進むども退く可きに退く能はざるは是れ勇あきあり暴虎憑河事に益なし大丈夫爲さるるあり蓋し世路紛糾進むが如くにして實は退き退くが如くにして實は進む所以のものあり士たるの大要機を見て順逆を分ち是非を究めて嚮背を定むべきあり而して之をあす識見を要す識見あくまて紛糾の間中道に據らんとするは難い哉潺々たる溪流巖角に碎けて泡沫とあり懸崖を下て飛瀑とある忽ちにして渾忽ちにして瀨屈曲淹滯一上一下而も其下自ら大河をあし人亦水を謂ふて退くとせざるあり而して水をして是に至らしむるものは他なし只其低きに就くの性のみ思ふべきあり士常に道に志まて止まずんば豈に進退出處を憂ふべけん世に容れられざるを憤つて山野は遁るゝが如きは吾れ何の意たるを知らざるあり